十八モラトリアム

すずの

歌うみたいに本屋に行って、カッターナイフと詩集を買った。
てのひらサイズで海色をしたカッターよりも、普通の大きさで、くすんだピンク色のそれの方が遥かに安いのが、人生みたいだなあって思う。軽々しく、じんせい、なんて呟けたなら、君はもう大人になれるってわけだ。

じんせーい！　空が青い。

踊るみたいに避けあって、スカートが雪崩みたいに舞った。
うつくしさを振りかざして、君はずっと私を嫌いでいい。ふたりで食べた肉まんもアイスも、随分と安上がりな幸せだった。それでいい。それがいいよ。ねむたい、と思うままに手首を切れば、水色の星が流れ落ちるって、知ってた？

投票、します。だから助けて。

一編の人生が七十八億集まって、一冊の世界が出来ている。私はそのうちの一編を捨てるために、誰かの歌を諳んじた。君の喪失を大人と呼ぶなら、私の世界にはいつだって、大人になりたくなかった子供がぎゅうぎゅうに詰められている。出来損ない大人って、私のことだよ。
トートロジーなあいの言葉が、春と夏の真ん中に頼りなく転がっていた。

さて、これはどーとく？